The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究会を終えて
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 153-154
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究会を終えて

宇野田　尚　哉

1950年代のサークル運動を中心とする戦後日本の文化運動に対する研究関心が同時多発的に高まったのは、2000年代半ばのことであったように思う。私自身の仕事に即して言えば、私が詩人金時鐘を中心とする在日朝鮮人サークル詩誌『ヂンダレ』の現物と出会ったのが2003年、『ヂンダレ』研究会を組織してその復刻版を刊行したのが2008年、その次の仕事として『われらの詩』研究会を組織したのが2010年、その復刻版を刊行したのが2013年のことである。振り返ってみれば、すでに10年もこの方面の研究に関わってきたことになる。私自身の文脈を離れて、同時多発的に各地で始まった研究を見渡せば、その蓄積がすでに相当な分量に達していることは、たとえば水溜真由美「研究動向 サークル運動」（昭和文学会『昭和文学研究』第61集、2010年９月）を参照すれば、容易に了解されるだろう。

2000年代半ばに同時多発的に高まった関心を共有する交流の場として生まれたのが、今回日本学方法論の会との一部共催を了解してくださった戦後文化運動合同研究会であり、私自身もそこに第３回から関わって、多くのことを学んできた。ただ、交流の場が生まれ、その輪が広がり、時間が経つなかで、資料の発掘と情報の交換が自己目的化するような傾向が生まれてきているように私には感じられる。「趣旨説明」でも述べた通り、今回の企画の根底にあるのはそのことに対する私の違和感であり、なぜこの研究に取り組むのかをあらためて問いなおしてみてはどうかという問題提起をなるべく広い視野から行いたいと考えて設定したのが、この「グローバル冷戦と文化」という、誇大妄想と言われても仕方のないテーマである。

このような問題提起を行うにあたって、50年代の文化運動の研究を牽引してこられた鳥羽耕史さんと川口隆行さんを報告者としてお迎えすることができたのは幸いであった。また、コメンテーターのお二人も、企画者の無理な注文に可能な限り応えようと努力してくれて、荒削りではあるものの自分の研究に関係づけつつ広い視野からコメントしてくれた。日本学方法論の会を開催する意義の一端は、院生諸君に主体的に発言してもらうことにあるとするなら、お二人のコメントは今回の研究会の非常に重要な部分をなしたと言ってよいと思う。報告者、コメンテーターをはじめ、今回協力を賜ったすべての方々に、あ

らためて謝意を表したい。

私の意図した問題提起の受けとめられ方はさまざまであろうが、討論の場などではそれなりの手ごたえがあった。また、言うまでもないことではあるが、私自身も機会をあらためて自らの問題提起に責任を負っていかねばならないと考えている（さしあたり、私の立場としては、ヂンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動―幻の詩誌『ヂンダレ』『カリオン』を読む』〔人文書院、2010年〕所収の「東アジア現代史のなかの『ヂンダレ』『カリオン』」を参照していただきたい）。戦後文化運動への研究関心の高揚からおよそ10年、この特集がこの方面の研究の中間総括やさらなる前進の一助となれば幸いである。

最後に、研究会後に判明した資料の所在等について一言しておく。神戸大学附属図書館総合・国際文化学図書館所蔵の新島繁文書のなかに、『希望（エスポワール）』関係の資料が２点含まれている。１点は、『えすぽわーる通信』第１号（エスポワール文化サークル機関紙、1952年９月１日発行、旬刊、エスポワール社、資料番号11-142-6）、もう１点は、「『希望』は貴方と共に!!―この火は絶やすな―」と題された入会・寄付をうったえるビラ（「エスポワールの沿革と一九五三年度事業計画」という記事が含まれるので、1952年度中の発行か？資料番号9-13）である。鳥羽報告のなかで言及のあった『ESPOIR WEEKLY』とともに、『希望』の関連資料である。また、研究会当日にはまだ誰も目を通していなかったのであるが、2013年10月末に広島市文化協会文芸部会編『占領期の出版メディアと検閲―戦後広島の文芸活動―』（勉誠出版）が刊行された。『希望』『われらの詩』と関係するところの多い書物なので、付記しておきたい。

（うのだ　しょうや　大阪大学大学院文学研究科教員）